

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	大 貫 挙 学
<p>主 論 文 題 名 :</p> <p style="text-align: center;">社会空間と性的主体化 ——バトラーにおける「パフォーマティヴィティ」概念の再検討——</p>			
<p>(内容の要旨)</p> <p>本論文の目的は、J. バトラーにおける「パフォーマティヴィティ performativity」概念の再定位を通して、性的主体化と社会空間の関係を捉え直すことにある。とくに、主体の言説的構築を前提とする立場から、異性愛主義や性差別の物質性、および既存の空間的秩序に対する抵抗可能性を論じる。</p> <p>ポスト構造主義やカルチュラル・スタディーズといった潮流以後、主体／アイデンティティは社会的に構築された非固定的なものと考えられるようになった。ジェンダー研究においても、これは例外ではない。むしろフェミニズムは、解放の「主体」としての「女」というものに普遍的共通性・理解可能性はあるのかという観点から、この種の問題提起を以前から行ってきたというべきだろう。</p> <p>そして、このような視点をもっとも徹底させた論者のひとりとして、バトラーをあげることができる。バトラーの「パフォーマティヴィティ」概念は、主体が言語行為による絶えざる構築過程にあることを示している。</p> <p>この点、L. マクネイは、バトラーと問題関心を共有したうえで、バトラー理論への内在的な批判を行っている。とくに本論文において重要なのは、マクネイが、社会理論との接合を模索しながら、バトラーについて論じていることである。マクネイは、近年のフェミニズムにおける M. フーコーや J. ラカンの影響を「ネガティブ・パラダイム」と呼び批判する。そして、バトラー理論は、「ネガティブ・パラダイム」の典型とされる。マクネイによれば、バトラーにあっては、主体の言説的構築という「象徴的なるもの」の次元のみが重視され、「物質的なるもの」が適切に扱われていない。さらにマクネイは、社会の複雑性や行為の時間性に焦点を当てるべきだという。そして、それらがバトラーには欠けていると主張するのである。</p> <p>しかし筆者は、バトラー理論のなかにこそ、かかる論点を考察するヒントが示されていると考える。本論文では、バトラー理論が社会学的に再構成されるとともに、性的主体化の機制が、近代的諸制度の物質的側面と関連づけて明らかにされる。すなわち本論文において、「パフォーマティヴィティ」概念自体の検討と、それに依拠した近代社会論の構築とは、表</p>			

裏一体のものとなっている。

上記の目的を達成するため、本論文は大きく3部で構成される。

第I部「『主体』と『他者』」においては、バトラーのテキストを検討しつつ、主体化やそれにとまなう他者の構築／排除の機制を論じた。

第1章「ジェンダー理論における『主体』の問題化」では、ジェンダー研究の系譜のなかにバトラーを位置づけ、バトラーの「主体」観の特徴を確認した。ジェンダー概念の展開は、性別の社会性や、その背後にある権力関係の問題化の歴史だったといえる。そして、かかる視点を前面に押し出したのが、バトラーである。バトラーによれば、行為のまえに起源としての主体が存在するのではなく、個々の言説実践によって、遡及的に、主体が（あたかも起源であるかのように）設定されるのだ。とくに彼女が強調するのは、ジェンダー・カテゴリーが社会的に構築されているということである。バトラーは、こうしたカテゴリー化、すなわち主体化の暴力性を指摘する。さらに彼女は、ジェンダー・カテゴリーの産出と異性愛主義との関連を述べている。異性愛を規範化する社会にあっては、「男」は「女」を、「女」は「男」を性愛の対象とするのが「自然」とみなされるが、この異性愛規範が、逆にジェンダー規範（ジェンダー・カテゴリーの有意味性）を維持・強化するのだ。このような社会的権力こそが、フェミニストとしてのバトラーにとって、批判すべき対象となる。彼女はまた、パフォーマンスの時間的契機を強調することで、既存の秩序の攪乱を理論化しようとするのである。

かくしてバトラーは、言語の外部を実体化するような思考を拒絶する。こうした立場から彼女は、J. ラカンの「現実界」概念を批判する。**第2章「ふたつの『他者性』」**では、「現実界」をめぐるバトラーとS. ジジエクの議論を考察した。バトラーにとって、ジェンダー・カテゴリーは、言語によって／の内部でのみ意味づけられる。しかし、ラカン派の概念装置では、言語の外部がすでに性化されてしまっているという。これに対して、ラカン派の批評家であるジジエクは、ラカン解釈の誤りとして、バトラーに反論する。ジジエクは、「現実界」という言語の「裂け目」があるからこそ、既存の言語秩序は変容するというのだ。バトラー／ジジエクの論争においては、ふたつの水準の「他者性」が混同されており、それゆえ、両者の議論はすれ違いをみせている。すなわち、ある言語体系の内部で周縁化される具体的他者と、言語活動に不可避な言語化の不可能性（それゆえの別様の可能性）である。本論文では、バトラー自身の用語を使って、それぞれを「(非)主体 (un)subject」および「批判的脱主体化 critical desubjectivation」と呼び、改めて、両者の関係を問い直した。

次に第Ⅱ部「『(非)主体』と『社会空間』」として、第Ⅰ部で区別したふたつの「他者性」のうち、「(非)主体」概念に着目し、性的主体化と制度の物質性の関係を検討した。

第3章「異性愛主義の物質性」では、「(非)主体」としての「同性愛者」について、社会空間上の位置／不在を論じた。マルクス主義フェミニズムの理論枠組みを参照するとき、「同性愛者」のおかれた不安定な位置が明らかになる。マルクス主義フェミニズムにおいて、公的領域は成人男性の空間とされるが、このことは、公的領域が異性愛男性のための空間であることをも示している。E. K. セジウィックが述べるように、男同士の連帯は、ミソジニーとホモフォビアとで構成されるからだ。したがって、性的に有徴化された「同性愛者」は、公的領域での居場所を与えられない。だが他方で、私的領域たる「家族」も、異性愛を前提としているのである。こうした存在のあり方が、「(非)主体」としての「同性愛者」だといえるだろう。

ただし、このことは、性差別（ジェンダー）と異性愛主義（セクシュアリティ）が別の水準の問題であることを意味しない。たしかに、「異性愛」の「男」「女」が、公的領域と私的領域にそれぞれ配置されるのに対して、「(非)主体」としての「同性愛者」は、公私に分離した社会空間において居場所を見出せない。しかし「同性愛者」は、異性愛「男」「女」の主体化を、その構成的外部として支えているという点で、社会空間の構造化に関わっているのである。すなわち、「(非)主体」としての「同性愛者」は、いわば否定的な形で社会空間と関係しているのであり、一見、社会経済構造に組み込まれていないことによって、社会経済構造に関わっているのである。

とはいえ、「(非)主体」を「同性愛者」に限定して解釈するのでは、「主体」と「(非)主体」の関係を固定的に捉えすぎていることになる。そこで第4章「マルクス主義フェミニズム理論の再構成」では、主体／(非)主体の相対的關係という観点を導入した。本論文では、「(非)主体」を、社会空間上の位置を与えられない存在とみなしている。一方、マルクス主義フェミニズムは、近代社会における性差別を、「男」「女」の社会空間上の配置として描いている。この図式にしたがえば、女性は社会空間に組み込まれていることになる。だが、女性の再生産労働は、労働市場のなかに位置づけられていないがゆえに、かつては「搾取」として問題化されることはなかった。しかし今日、私的領域たる「家族」が、「公的領域」の外部にありながら「公的領域」を支えていることが明らかとなっている。「女性」は、公的領域に組み込まれていないが、そのことによって逆説的に、公的領域の構成に関わっているのである。すなわち、私的領域における「女性」の再生産労働は、公的領域における「男性」の経済活動を背後から支えている。異性愛の「女性」もまた、「男性」との関係においては「(非)主体」なのだ。

マルクス主義フェミニズムにおいては、物質／文化という二元論が採用され、性支配が前者に還元されている。また、ジェンダー規範の「原因」として設定されたはずの家父長制の「物質的基盤」において、予め男／女という主体が前提とされてしまっているのである。この点、バトラーの「パフォーマティヴィティ」概念は、社会的位置のパフォーマティヴな構築を示すものでもあった。したがって、予め主体化された存在である「男」「女」が、社会空間上の公的領域と私的領域とに配置されるのではなく、公的領域を担う「男」と私的領域を担う「女」という主体のパフォーマティヴな構築を通じて、公私に分離した社会空間もまた産出すると考えるべきである。

つまり、象徴レベルでの言説的主体化は、社会の物質的側面と不可分なのだ。ようするに、さまざまな主体／（非）主体関係が、折り重なるように社会の内部／外部の境界を暫定的に定義しているのである。そして、社会の内部／外部の境界画定不可能性は、差別・抑圧についての物質／象徴関係の相互還元不可能性を示している。

最後に**第Ⅲ部「『批判的脱主体化』と『未来』**」では、第Ⅰ部で区別したふたつの「他者性」のうち、「批判的脱主体化」を取り上げ、社会制度の変容／攪乱について考察した。

まず**第5章「『パフォーマティヴィティ』の『時間性』**」では、「批判的脱主体化」を「未来」への志向性と捉え、その理論的可能性を論じた。バトラーは「パフォーマティヴィティ」概念の「時間性」を重視するが、それは〈過去→現在→未来〉というクロノロジカルな因果関係を意味するものと考えべきではない。言語行為の瞬間において過去と未来が召還される。つまり、発話の状況や文脈自体が、時間的な非決定性を帯びているのだ。

たしかに、個々の言語行為は、既存のコンテキストとの関係において可能となる。言語行為は過去から切り離されたものではありえない。だが言語行為によって、新たなコンテキストへの接続がなされることになる。ここに脱主体化の契機がある。もちろん、主体化が言説的なものである以上、私たちは言語による被傷性から逃れられない。それゆえ、コンテキストを、（それらに依拠しながら）絶えず脱文脈化していくしかない。しかし、既存のコンテキストとされるもの自体も、一義的には決定できない。既存のコンテキストは言語行為の結果としても立ち現れるのである。すなわち、ある「瞬間」における既存のコンテキストの発見は、それ自体が言語行為である。そして、既存のコンテキストを問題化するという新たなコンテキストがその「瞬間」に現れる。同時に、既存のコンテキストは、それが接続される新たなコンテキストとの関連においてのみ意味をもつ。言語行為は、コンテキストに規定されながらも、それが依拠するコンテキストや、新たなコンテキストを呼び起こす。未来の偶発性は現在を語ることのなかに存するのである。

そのうえで、こうした「批判的脱主体化」を社会空間の変容という側面から考察したのが、**第6章「公私二元論の再検討」**である。

第二波フェミニズムは、「親密」な関係における権力の存在を暴露した。だが一方で、フェミニズムの批判を受けた後に、「親密圏」あるいは「個人的な領域」をいかに捉え直すべきかという課題も浮上している。こうした問いに応えるため、D. コーネルの議論を参照した。コーネルは、リベラリズムにおける「主体」概念を再構築し、自分が何者であるかを自由に表象でき、かつ自由に再想像することのできる「道徳的空間」として、「イマジナリーな領域 imaginary domain」という概念を提示する。本論文では、「イマジナリーな領域」を、メトニミーを可能にする条件として位置づけ直し、さらに、ラクラウのいう「社会的なるもの the social」と接合した。私たちが何者であるのかを再想像する空間としての「イマジナリーな領域」を保護することは、別の社会の可能性に向けて「社会的なるもの」を開いておくこととにほかならない。

したがって、本論文の立場から社会制度について述べるとすれば、特定の内容をもった社会空間のあり方に特権的な価値を与えるのではなく、むしろ、主体や空間のあり方を、つねに（潜在的に）他の可能性に開いておくことが必要なのである。

このように本論文は、バトラーの「パフォーマティヴィティ」概念を導きの糸として、主体化と排除、社会の偶発性との関係を検討するとともに、異性愛主義や性差別の物質性を考察してきた。

バトラーは、権力による主体の産出を指摘するが、それは、単なる社会（言語）決定論を意味しない。むしろ彼女は、固定的かつ一枚岩的な社会観を批判するのである。本論文では、「（非）主体」を「社会内的」にさまざまな位置を与えられたものと捉え、社会制度における物質的側面と文化的側面の関係が相対的なものであることを主張した。また、「批判的脱主体化」を「未来」の「偶発性」として理解した。ここでの「未来」「偶発性」は、あくまで現在の権力との関係においてのみ主題化されるべきものとなる。

もっともバトラーは、フェミニズムの立場から、政治的状況との緊張関係のなかで自らの言説を紡ぎ出している。そのため、「バトラー理論」といった統一的体系を想定すべきではないという見解もある。バトラー自身、哲学の制度的枠組みとしての「理論」は、制度外の実践によって常に「増殖／再二重化 redouble」されるべきだと述べている。本論文も、「バトラー理論」なるものの全体像を示すものではない。本論文は、「社会学理論」としてバトラーを読むための、いわば「読み方」を模索したものとイえる。それは、バトラーを介して社会学理論を「増殖／再二重化」させる実践でもあるだろう。